

バックパッキングとメディア

桐蔭横浜大学

大野哲也

ほんのちょっぴり本音を吐けば、人のためにもならず、学問の進歩に役立つわけでもなく、真実をきわめることもなく、記録を作るためのものでもなく、血湧き肉踊る冒険大活劇でもなく、まるで何の意味もなく、誰にでも可能で、しかし、およそ酔狂な奴でなくてはしそうにないことを、やりたかったのだ（沢木 1994:25）。

これは 1990 年代に、日本人バックパッカーの「バイブル」とさえいわれた『深夜特急』の著者沢木耕太郎が、なぜ旅に出たのか、その理由を自己分析した文章である。この「つかみどころ」のないモチベーションを原動力にして、沢木は、すべての仕事を放擲して旅に出た（沢木 1994:3）。

沢木の旅の目的は、インド・デリーからイギリス・ロンドンまで乗り合いバスだけで行くことができるのか、それを自分の身体をつかって確かめるということだった。こうして沢木の「いきあたりばったり」なユーラシア大陸横断の旅がはじまった。1974 年、26 歳のときだった。

旅を終えて日本に帰国した沢木は、自身の波瀾万丈な旅物語を新聞に連載するチャンスを与える。それが好評を博し、86 年に単行本として、1994 年には文庫本として出版された。

この『深夜特急』は、今日に至るまで、多くの日本人バックパッカーから「バイブル」といわれるほど絶大なる支持を受けてきた。そのことは、1996 年から 98 年にかけて、人気俳優が主演し、単発ドラマとしてテレビで放送された、ということからも確認できる。

1996 年は、くしくも、テレビのバラエティ番組で、2 人組のコメディアン『猿岩石』^{さるがんせき}が、香港からロンドンまで、ヒッチハイクで旅をするという企画が放送された年でもあった。猿岩石の「貧乏旅行」は、日本の、特に若者たちに強烈なインパクトを与え、社会現象にまでなった。いうまでもなく猿岩石の旅は、テレビ用にアレンジされた沢木の旅の「1996 年バージョン」だった。このテレビ番組がきっかけとなって、バックパッキングという旅の形態が、改めて日本社会で認知されるようになり、その後、バックパッカー人口が増加していった。

こうしたプロセスを経て、バックパッキングは、日本社会でメディアのちからによって「発見」され、日本社会に定着していった。そしてバックパッカー人口が増加していく過程で、バックパッキング自体もその内実を変化させていった。

本発表では、バックパッキングという旅の形態が、メディアのちからによってどのような変化を遂げ、それは現在、日本社会においてどのような機能を有するのかについて検討をすすめていく。

参考文献

沢木耕太郎 1994『深夜特急 1 香港・マカオ』新潮文庫。